

# 感じる身体、応える身体

## 特別養護老人ホームでのダンスワークショップより

踊りましょう。なんでもいい、ちょっと踊ってみませんか。

そう手をさしのべられて、すぐに相手の手をとる人は、そう多くはないだろう。たとえそこが、ダンスのワークショップであったとしても、だ。振り付けをあてられて踊った経験など、学校を出てついぞない。しかも、「踊りましょう」と言っている相手は、どんな風に体を動かすかも判らない。まして、なんでもいい、と言われても、何を手がかりにどう踊ればいいのか。そもそもこの相手を信用していいのか。赤っ恥をかかされたらどうするのか。

2010年、奈良県下の特別養護老人ホーム「西ノ京苑」で佐久間新さんと入居者、介護者のみなさんとのダンスワークショップが行われた。佐久間さんのワークショップは変わっている。最初こそ「ちょっと手を叩いてみましょうか」といった指示はあるけれど、佐久間さんのことばはどんどん少なくなってくる。そのうち、輪になった参加者の一人に佐久間さんが近づいて、手をさしのべる。「よかったら、ちょっと踊ってみませんか」。いやいや、と猛烈に手を振って断る人もいれば、きよんとしている人もいる。けれど、同じタイプの応答が続くということはない。あるいは佐久間さんのゆっくりとした近づき方が、さまざまな断り方、さまざまな姿勢を引き出しているのかもしれない。ちょっとした応答と、それにつれて動く身体。もう踊りは始まっているのかもしれない。けれどそれはまだ、ごく短いものだ。

すいと手をとってしまう人もいる。けれど、その人も、これから何が起こるのか知っているわけではないだろう。台本もなければ、打ち合わせもない。あらかじめ決められたルールも振り付けもない。そんな、ほとんど手ぶらの状態から、人はどうやって踊ることができるのか。もし踊ることができたとして、それは個人の「巧さ」や「センス」として片付けられるようなものだろうか。

この、簡単なようでむずかしい問いを考えるために、ここでは、ワークショップで実際に起こった、ほんの短いあいだに起こったやりとりを見ていこう。「巧さ」や「センス」といったことばをいったん棚上げにすべく、ここではわたしたちがいつもリアルタイムで感じている感覚とは異なる感覚をなぞる。簡単に言えば、普段とは違う時間単位、コンマ秒単位の世界で、動きを見るのである。体を動かしている人たちの、ちょっとした腕の上げ下ろし、体の向きの変化を細かく見て、それがどんな風にお互い連なっていくかを考える。そんな小さなことにこだわって何がおもしろいのかと身構える方もおられるかもしれない。が、まあ、しばらくおつきあいいただきたい。わたしたちの体はそんな細かい時間単位の中で、驚くほど精妙に、お互いの動きを調整しあっている。それをつぶさに考えていくことで、もしかしたらわたしたちの日常生活の所作への見方も、少し変わるかもしれない。

## 踊りになるまで

佐久間さんのワークショップをビデオで見直していて、あるご婦人の動きに目がとまった。車いすに座られて、上半身だけで手踊りをされる。派手なところはない。が、どういうわけか、ほかの参加者からくすくすと笑いが起こる。あちこちで体を揺らしている人がいる。笑いは単に儀礼的なものでなく、確実に、見る人の体を揺すっている。もちろん、台本や打ち合わせはない。

わたしは、あらかじめ決まりごとがない状況での人の行動を観察するときは、そのごく初期に注意することになっている。出会って何秒かの間に、わたしたちは挨拶を交わすだけでなく、お互いの位置を変え、体を動かし、これからやりとりをする相手と何をやりとりできるか、見定めようとする。そこでは、会話や作業や踊りのクライマックスに勝るとも劣らない、濃密な相互作用が起こっていることが多い。そこで、この佐久間さんと石田さんのやりとりでも、二人の動きのごくごく初期の段階に注意してみよう。きっとそこで

は、予備知識なしに体を動かし始めた二人が、何を手がかりにお互いに動いていったかが鮮やかに現れているはずだからだ。

そんなわけで、以下、分析するのは、佐久間さんと石田さんが参加者の輪の中心に移動した直後、踊りともただの動きともつかぬやりとりが始まりつつある、そのごく短い時間に起こった動きを、細かく見てみよう。

佐久間さんは、車椅子に乗った石田さんの手をとって輪の中心へとエスコートする。このとき、石田さんは手のひらを下向きにしており、佐久間さんは手のひらを上向きにして石田さんの手を引いている。輪の中心にたどりつき、二人はゆっくり手を離す（図 1-(1)）。が、その手はすぐには下りない。

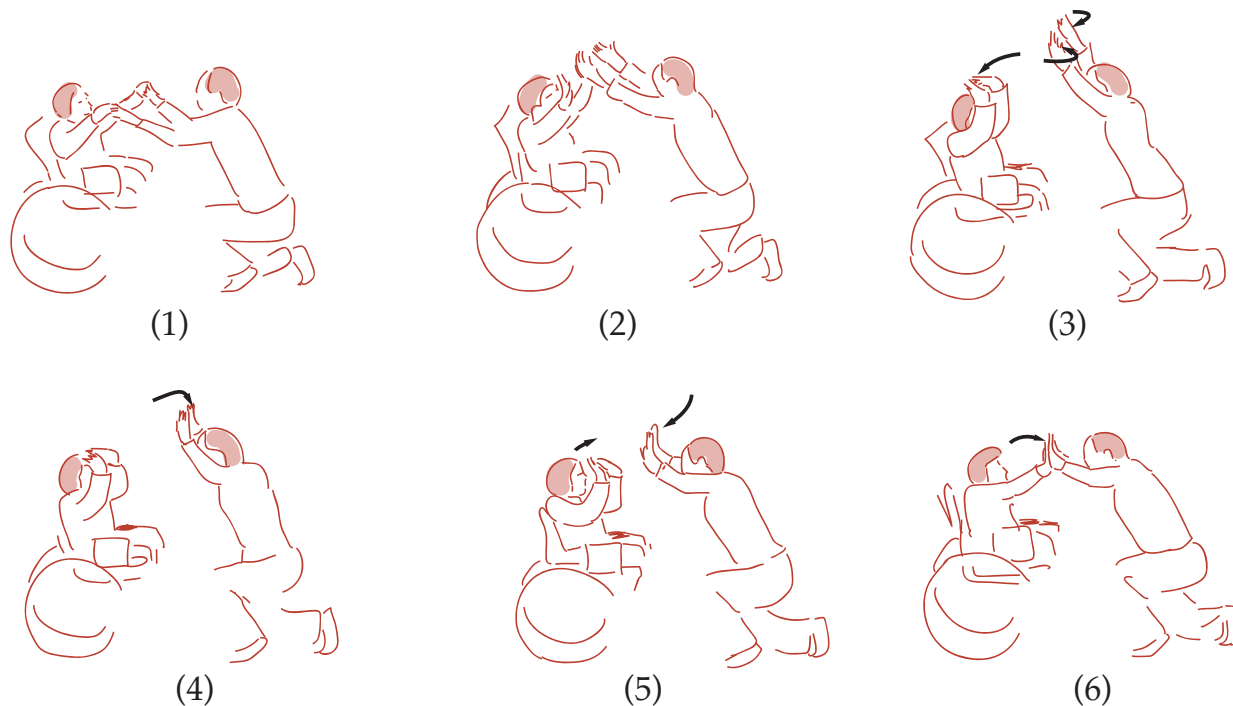


図 1

わたしたちは、挨拶するとき、握手したりおじぎをしたりあるいは軽くハグをしたり頬と頬とを寄せ合ったりする。けれども、その動作はたいてい単発のもので、わたしたちの身体はすぐに「ホームポジション」と呼ばれる場所、たとえば腰、膝の上へと引っ込んだり、あるいは前や後ろで軽く手を組んだりする。わたしたちは挨拶の動作によって出会いの始まりを区切ると、いったん姿勢をリセットして、それから会話へと入ることが多い。作業の手を止めた場合にも、やはりわたしたちの体はいったんホームポジションへ戻って、その作業を一区切りする。

では、佐久間さんと石田さんはどうだろう。二人の手はここまで、輪の真ん中に移動するためにつながれていたに過ぎない。離れた手を引っ込めて、だらりと体にぶらさげて、それからあらためて踊りらしき動きを始めることもできたかもしれない。けれど、二人の手は、すぐには引っ込まなかった。

二人はどうしたか。まず石田さんは、佐久間さんをつないでいた両手をおろすかわりに、手のひらを佐久間さんに向けて、頭の上で掲げた。このとき佐久間さんは手のひらではなく、手の甲を石田さんの方に向けていることに注意しよう（図 1-(2)）。佐久間さんは石田さんの手を引くとき、手のひらを上に差し出し、石田さんはその上に、手のひらを下にするように乗せていた（図 2）。だから、二人の手が離れたときは、佐久間さんが甲を、石田さんは掌を相手に見せている。

さて、二人はこのあとどうするだろう？

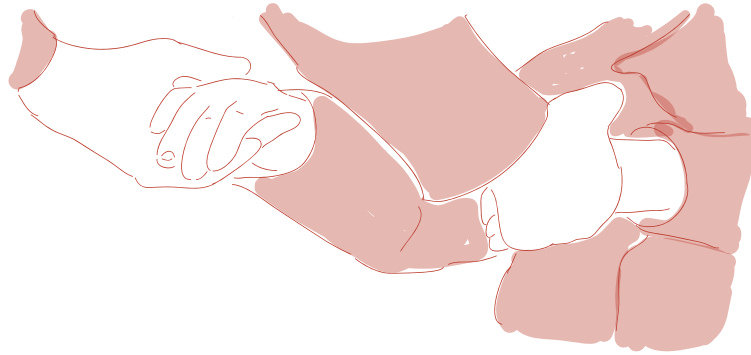


図 2

わたしはよく、動作の分析をするときに、動作を途中まで見せたところでぱっと止めて、ゼミの学生に聞いてみる。その方が、すぐに続けて見るよりも、動作の持っている可能性がよく判るからだ。わたしたちの動作は、必ずこうなるという一筋の可能性だけに絞り込まれているとは限らない。わたしたちは、そのつど、動作に含まれている数ある可能性の中の一つを選び取っているに過ぎない。けれど、動作を続けて見てしまうと、あたかも起こったことだけが、たった一つの可能性、唯一の正解のように感じられてしまう。だから、わざと、途中で止めてその先を推測してもらおう。

おもしろいことに、返ってくる答えは一つとは限らない。また、動画をどこで停止するかによって異なる。

二人が手を離して間もないところ、佐久間さんがまだ手の甲を石田さんに見せているところでは、意見はいくつかに分かれる。このまま手を下ろす。二人が手を両側に広げていく。このままじっとしている、など。

実際はこうだ。佐久間さんは石田さんを見ながら、手をくると裏返して、手のひらを石田さんに向ける（図 1-(3)）。石田さんは、なおも手を下ろさない。頭の上に掲げてじっとしている。佐久間さんの手は弧を描いて、ゆっくりと下り始める（図 1-(4)）。それを見た石田さんの手が前に出る（図 1-(5)）。さて、ここまで見れば、もう予測がつく。学生たちも、こう予測する。二人は両手を合わせにいこうとしているに違いない。

ところが、佐久間さんはここでちょっと不思議な動きをする。近づけた手を途中で止めて、様子をうかがうのである（図 1-(6)）。石田さんは、佐久間さんと手を合わせようとして、上体をぐっと前に出す。そして止まっている佐久間さんの手に届かせる。ようやく、手と手はぱん、と叩かれる。謎めいた動きだ。この動きがいったい何をもたらすかは、後で考えよう。

さて、ここまでが、二人が輪の中央に来てから動き始めた、最初の 1.8 秒間のできごとだ。一見すると、とりたてて目立ったことが起こっているわけではない。二人の動作は「手を離してから手と手をぱんと合わせました」と簡単に考えてしまいたくなるものだ。けれど、手をぱんと叩く、という動作は、あらかじめ決まっていたわけでも台本に書いてあったわけでもない。そしてよく見ると、二人の動きは最初から何の滞りもなく手をぱんと叩く動作に向かっていたわけではない。佐久間さんは石田さんの手のひらを見て、自分の手のひらを返すことにした。石田さんはそれを見ながら、手を掲げ続けた。佐久間さんは手を近づけようとして、途中で止めた。手をお互いに近づけようとする石田さんの予想を、いわば少し裏切る形で止めているのである。そして、石田さんは佐久間さんの真似をして手を止めるかわりに、あえて自分からその手を叩きに行った。どの段階でも、手を叩くのは別の動作が生まれる可能性があった。そのさまざまな可能性の中の一つを二人がそれぞれ選びとった結果、手を叩くというできごととは実現した。

つまり、お互いに離れた手を叩くという簡単な動作すら、たくさんの可能性の中から二人が選びとっていった即興なのである。しかも、どちらが主導権をとっているというわけでもない。また、一つ一つをいちいち時間をかけて考えているわけでもない。二人が手を離してから手を叩きあうまでは、わずか 1.8 秒。冷静に考える暇はない。二人はお互いの動きを見ながら、連鎖反応であっという間にある動作にたどりついているのだ。一つ一つの動作を見ていくと気が遠くなるような緻密さだけれど、これは施設に入っておられる

高齢者の方にもできる。わたしたちは、相手の身体を目の当たりにしたとたん、こうした複雑な動作を実現する力を持っているのだ。

二人が輪の中央に出てきたとき、石田さんの手は、佐久間さんに引かれている手であり、佐久間さんの手は石田さんを引いている手だった。その手を離れたとき、いったん手の緊張を解いてしまったなら、そこで動作は途切れてしまっただろう。けれどそうではなかった。二人は、引く／引かれるという関係を保っていた動作をやめるかわりに、その動作に伴われていた手の形をそのまま次の動作に用いた。石田さんは引かれていた手をそのまま掲げ、佐久間さんも掲げた。ある目的に使われていた手を、別のことに転用してしまうこと。それが二人の動きの始まりの、まず重要なポイントだ。

もう一つ重要なことは、二人のやりとりが、最初から最後まですべてスムーズだったわけではない、ということだ。佐久間さんは、一つ、大きなひっかかりを埋め込んでいる。端から見ても手を叩き合うだろうと予測のつく場面で、あえて手を止めて見せた。そして、その意味は、この時点ではまだ明らかではない。おそらく、佐久間さん本人にも、それが何をもたらすか、この時点で予測はついていないだろう。この謎は次の動きに持ち越すとして、続きを見てみよう。

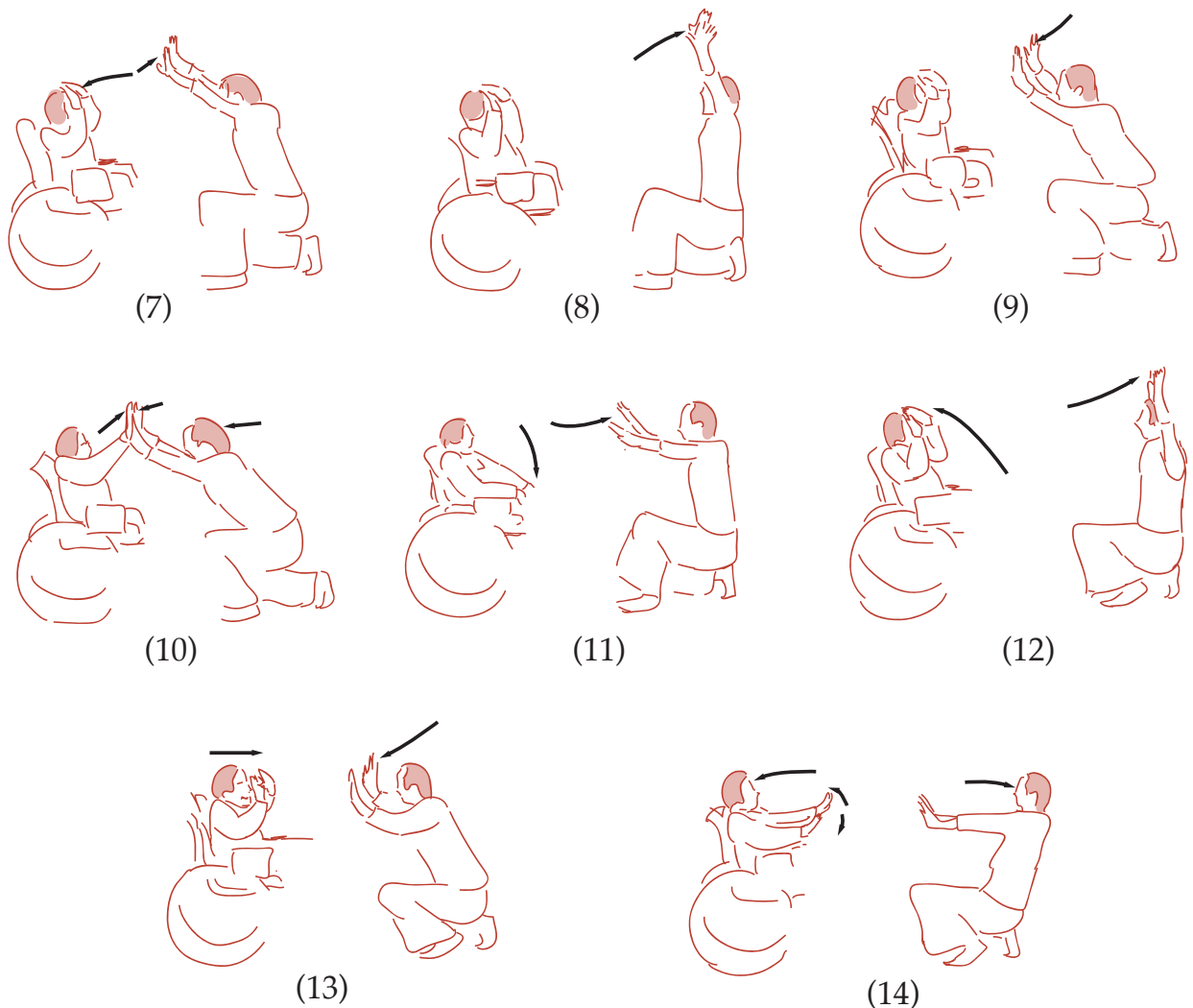


図3

手を叩きあった二人は、再びお互いの手を離して頭上に掲げる（図3-7）。このとき、石田さんがおもしろい動きをする。佐久間さんは掲げた手を石田さんの方に近づけて、再び手を合わせようとするのだが、石田さんはすぐには手を動かさずに、近づいてくる佐久間さんの手をしばらく見ているのである（図3-8),(9)。どうやら、佐久間さんが前に手を合わせたときにやった、ちょっとした「予想外の動き」を、今



度は石田さんがやって見せているのである。佐久間さんは石田さんになおも手を近づけていき、ほとんど身を乗り出すようになる。ここでようやく、石田さんはちゃんと手を差し出して、手を合わせる（図 3-(10)）。言うなれば、石田さんは、佐久間さんの一回目の「裏切り」に対して、ちょっとした仕返しをしているのである。ちょっと見ただけだと、単に一度目の手叩きと同じことを繰り返しただけに見えるが、実は二人の間には、相手の予想を裏切る丁々発止のやりとりが起きているのだ。

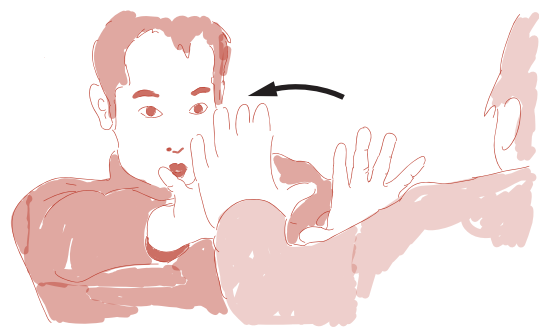
一度目に佐久間さんがやった、ちょっとした予想外の裏切りを、二度目には石田さんが返している。簡単に言えば、真似をしている。けれど、ああ真似かと片付けずに、もう少し丁寧に考えてみよう。真似、というとき、わたしたちはつい、形のことを考えてしまう。相手が口を開けると、こちらも口を開ける。相手がおもしろい顔をするところちかもおもしろい顔をする、という風に。しかし、石田さんのやっていることは、それだけではない。たとえば、佐久間さんのやった形をただ真似るだけなら、石田さんは気まぐれに動作を止めたり再開するだけでもよかっただろう。しかしそうではなかった。佐久間さんが手を近づけてきて、これはもう手を合わせようとしているに違いないという予測が立ち始めるちょうどそのときに、石田さんの手は止まる。つまり、動作の形（空間構造）だけではなく、動作と動作のあいだのタイミング（連鎖構造）が再現されている。

連鎖構造は、ただそれぞれの人が独立にうまく動くだけでは再現できない。たとえば、石田さんがちょっと待っている間に、佐久間さんが腕を開いたり左右に動かしたりし始めたら、もう違う動きになってしまう。石田さんが待つのが見た佐久間さんが、その手を叩こうと体を乗り出すことで、初めて、一回目のやりとりと対称的な動きが達成されるのである。つまり、一人が真似をするだけでなく、それを見た相手が、さきほどの行為を思い出し、自分もまたその真似に加わろうと思わなければ、真似は達成されないのである。そして、こうしたひとつつらなりの行為が達成されるのを見るとき、わたしたちは、単にうまい踊りを見ているなと思うだけでなく、二人のあいだに何か共有されているなど感じる。二人は、お互いの動きを、ばらばらなものとしてではなく、連なったものとして記憶しており、その記憶を蘇らせているのだと気づく。

二人の動きはさらに予想外の展開を見せる。二人はまた手を離すのだが、石田さんはすぐにひょいと手をおろしてしまう（図 3-(11)）。しかし佐久間さんは手を下ろさずに再び頭上高く掲げる。これを真似て石田さんも再び頭上高く手を掲げる（図 3-(12)）。二人はさきほどと同じく、お互いの手を近づけるのだが（図 3-(13)）、途中で佐久間さんは近づけるのを中断して、少し腰を落とす。すると石田さんも手を伸ばしたまま、それ以上近づけるのをやめる。そのまま二人は、お互いに壁を押しように上体を少しずつのけぞらせ、緊張していく。その緊張は 10 秒近くも続く。いつまで続くのか、と思った瞬間、石田さんがふうっと息を吸って、両手のひらをくるっと回して、上側に仰ぐような仕草をする（図 3-(14)）。すぐに佐久間さんも手のひらを上に仰ぐようにして、あたかも石田さんに命ぜられたかのように立ち上がる。見ている参加者から笑いが起こる。



(13b)



(14b)

図 4

なぜ石田さんは、ふうっと息を吸って両手のひらを動かしたのだろう。もちろん石田さんの機知のおかげだろうけれど、実は佐久間さんの表情にも秘密がある。別のカメラで見ると、二人が手を伸ばしたまま緊張する直前、佐久間さんはヒョットコのような「ほ」の形の口をして、息を吐く表情を石田さんに見せ始めている（図4左 13b）。そして、二人が緊張して手を伸ばしている間、小さく「はあっ」と息を吐く音をたてながら、口をゆっくりすぼめていく（図4右 14b）。この表情が、石田さんの呼気を誘い、続く吸気を誘ったのだろう。

佐久間さんは立ち上がって両手を鍵型に構え、石田さんも車いすの上で両手を鍵型にする。もはや二人ともダンサーのような構えになっている。ここまでくれば、誰が見ても、二人は「踊っている」と思うだろう。

こうして、二人の即興ダンスは始まった。けれど、重要なのは、そこにはいかにも踊っているかのような姿勢をとることではない。ダンスと見えるものを始めるまでに、手を引く、手を合わせるというごく日常的な動作を使って、二人がいかに濃密なやりとりをしたかに注意しよう。そして、それが講師の佐久間さんの一方的な指導によってではなく、石田さんとの相互作用によって成り立ったことにも注目しよう。相手の行為を引き出すために、自分の行為をちょっと止めてみる。当たり前に進むと思った行為が相手から得られないとき、こちらの行為の方向をちょっと変えてやる。二人の動きの中には、そうした、わたしたちの誰もが行うことのできる知恵が詰まっている。介護をしながらこと相手が思うように動いてくれないとき、ここで見た二人の動作を思い出してみよう。そうすれば、それは単に相手が動いてくれないという問題ではなく、相手と自分とのやりとりの問題だと気づくことができるかもしれない。